

# mundi

The Magazine of the Japan International Cooperation Agency

[ムンディ]

6

2016 June  
No.33



特集 スポーツ

人をつなぎ、国をつくる

夢をかなえるために、たくさん勉強しようね

Viet Nam ベトナム



ベトナムの古き良き農村風景を残す、ハノイ市南西部のドンラム村。村の子どもたちが楽しみにしているのが、週に1度の日本語教室だ。歴代の青年海外協力隊員が教え続けてきた歴史がある。

子どもたちはドラえもんが大好き。「ドラえもんは何をしていますか」。絵を見せると「ドラえもんはサカナをタベマス!」と、元気に答えてくれる。

この日は、ひらがなを読む練習。「さ」と「き」の違いが難しいみたい。教える私も悪戦苦闘だ。「日本に行って建築士になりたいの。その後、世界中を旅してみたい」。9歳のクイアインちゃんはそんな夢を持っている。



夏は40度を超え、冬は氷点下近くになる。厳しい環境で生き抜く子どもたちの目の輝きに、学びの原点を見た気がする。

撮影：浅田 南（ベトナム/青年海外協力隊）

あなたの作品募集中!

「my photo」では、あなたが撮影した写真を募集しています。貧困や環境問題などをテーマにした写真、国内外問わず国際協力の最前線で活動に励む日本人や開発途上国の人の姿、テレビや新聞ではなかなか報じられない土地の風景や人々の暮らしなど、国際協力や途上国を身近に感じられる写真を、撮影時のエピソードを添えてご応募ください。応募作品の中から毎号1枚、本コーナーで紹介させていただきます。

**応募条件** ①応募者本人が撮影した作品に限ります。②被写体に関する肖像権は、応募者の責任において了解が得られているものとします。③写真は、解像度が300万画素以上(目安)で撮影されていること、また画像の記録方式はJPEGを推奨します。

**応募方法** お名前、連絡先(電話番号とEメール)、エピソード(300~350字)、記名の可否をご記入の上、写真と共に応募先アドレスまでEメールでお送りください。  
\*応募作品は本コーナーの他に、事前確認の上でJICAの広報活動に活用させていただく場合があります。ご記入いただいた個人情報はこちら以外の目的では使用いたしません。また、応募作品はご返却いたしませんので、あらかじめご了承ください。

応募 / 問い合わせ先

jica-photo@idj.co.jp

(「mundi」編集部宛)

「mundi」はラテン語で「世界」。開発途上国の現状や、現場で活動する人々の姿を紹介するJICA広報誌です。

02 my photo 夢をかなえるために、たくさん勉強しようね ベトナム

## 04 特集 スポーツ

# 人をつなぎ、国をつくる

特別インタビュー 鈴木 大地 スポーツ庁長官

草原を拓く柔の道 モンゴル

体育教育を担う教師らに思いを託す ウガンダ

カリブ海の島国から世界に羽ばたく ジャマイカ

シリアに笑顔をもとめスポーツとともに生きる



20 PLAYERS 世界に貢献できる人材を 日本体育大学

22 世界とつながる教室 身体で感じる世界の遊び 大分県日田市 光岡公民館

24 JICA STAFF 小原 裕子 青年海外協力隊事務局 海外業務第二課

25 JICA UPDATE

## 26 特別レポート

# 高橋尚子さんが 見たラオス

—もう一つの戦争と障害者スポーツの芽



28 ココシリ 「ここが知りたい」いろんなトピックを分かりやすく解説!

## 30 地球ギャラリー

ブラジル

# もう一つのリオ ～ファヴェーラ断章



37 イチオン! 本・映画・イベント

39 MONO語り 黄色い金、祖国の目覚め

40 私のなんとかしなきゃ! 古賀 稔彦 柔道家



JICAのビジョン

すべての人々が恩恵を受ける、  
ダイナミックな開発を進めます

Inclusive and Dynamic Development

表紙

写真：アフロ

地面の露出した競技場で勝利を喜ぶ  
アフリカの少年たち。スポーツは、言葉  
や文化の壁を越えて人々を結び付け、  
飛躍への原動力となる



# スポーツは人々を一つにする

4年後に開催が迫る東京オリンピック・パラリンピック。歴史的な舞台に向けて、2015年10月、競技力の向上はもとより、スポーツを通じた地域活性化や国際貢献などを推進していくための「スポーツ庁」が新設された。その初代長官を務める、ソウル五輪競泳金メダリストの鈴木大地さんに、世界共通の文化であるスポーツが果たす役割について聞いた。

スポーツ庁長官

# 鈴木大地



ソウル五輪100m背泳ぎで金メダル獲得が決まった瞬間。勝利を引き寄せたバサロ泳法は、流行語にもなった  
(写真：日刊スポーツ/アフロ)

国境を越えて人をつなぐ  
言葉を越えた力

私は水泳のおかげで、金メダルを獲得したソウル五輪をはじめ、さまざまな世界大会に出場し、学校の勉強では得られないようなことを数多く経験させてもらいました。2度の五輪出場後は海外で水泳の練習をするようになりましたが、現地のコーチが技術面での優れたアドバイスをしてくれただけでなく、私生活の面でもさまざまな面倒を見てくれるなど、貴重な出会いがありました。中でもミシガン大学在籍時は、たった3ヶ月の間に多くの人と知り合いました。彼らとは今もネットを通じて交友があります。

スポーツの素晴らしさの一つは、言葉を超えて人と人が通じ合えることです。同じ種目、同じルールの下であれば、世界のどこでも同じことをやっているのですから。ですが、具体的な訓練や戦術などの面では、同じ水泳でも国によってアプローチが異なります。そうした違いから互いに学び、理解し合うことができるとは、スポーツの大きな魅力です。

先日、シンガポールを訪問したのですが、シンガポールは華僑やマレー系、インド系などの人々が集まってできた新しい国なので、国としての伝統文化、アイデンティティーにあたるものがないのですね。そこで、スポーツをシンボルに人々をまとめようとしています。今年8月のリオデジャネイロ五輪では、旧ユーゴスラビアのコソボや5年前に独立したばかりの南スーダンが、初めての五輪参加を果たします。民族や歴史を超えて国を一





今年5月に行われたジャカルタ「絆」駅伝にも参加した。スタートラインで他の参加者と共に（提供：毎日新聞社）

るかもしれません。車椅子の人たちを含めて、全ての人が生活やスポーツを楽しむこと。さらには人々がスポーツを通して心身を健康に保ち、元気なお年寄りが多い社会を作っていくこと。そうした、高齢化社会の新たなモデルを示す最初の国になることが、4年後という近い未来に東京でオリンピック・パラリンピックを開催する大きな意義ではないでしょうか。



マラソン元日本代表の有森裕子さんと共にシンガポールの水泳プログラムを視察・指導する鈴木長官。水泳、ひいてはスポーツ全体の振興に尽力している

### 性別や文化を超えて 日本と世界をリードする

日本社会では女性の社会進出が十分に進んでいないとよく指摘されますが、スポーツ界の現状をご存知ですか？ 実は、04年のアテネ五輪以降、日本代表に選ばれる選手は男性選手より女性選手の方が多いことも珍しくなくなりました。スポーツ界では比較的、女性が活躍する環境が整っているといえるでしょう。女性活躍という面で、スポーツ界が日本社会をリードしていければいいと思っています。

ただ、女性アスリートの活躍にもいくつか壁があります。結婚した女性アスリートが競技を続けることは増えてきましたが、日本の場合、出産後もアスリートとしてのキャリアを継続する選手がとて少ないのです。このことに関して、スポーツ庁では現在、調査研究を行っているところですが、出産を経験した女性アスリートのサポートは今後、重要な課題になってくると思います。

女性アスリートに壁が立ちただかるのは、他の国でも同じです。途上国など、

## 既存の省庁の枠を超えて スポーツ行政を推進していきたい

つにまとめ、言葉や文化を超えて人々をつなぐ。スポーツの可能性はそこにあります。

**オリンピックは平和の祭典  
世界にビジョンを発信したい**

オリンピック・パラリンピックは、アスリートにとってとりわけ特別な意味を持ちます。全てのアスリートがこの大会を目指し、世界中から選手が集まってレベルの高い戦いになるのですから。同じルールの下で、世界最高水準の人たちが争い、全身全霊で競技に参加する中で、大きなドラマが生まれます。いまや、単なるスポーツ大会ではなく、世界で最も大きなイベントの一つといえるでしょう。

とはいえ、オリンピックはメダル争いが本質ではなく、もともとは平和の祭典です。古代オリンピックでは、開催中とその前後の期間が休戦となったことに倣い、近代オリンピックでも国連が停戦を呼びかけています。

また、開発途上国では貧困層を中心に、スポーツがなければ犯罪などに手を染めていたかもしれない人々が、スポーツによって健全な生活を維持できていることもしばしばあるといえます。自国の代表や世界中の選手たちを応援することで、人々がつながり、前向きに生きていくことには大きな意義があります。

日本は2020年、東京でオリンピック・パラリンピックを開催することになりました。私はスポーツ庁長官として、現在、さまざまなスポーツや競技大会を

スポーツに十分な予算を割けない国では、女性アスリートへの支援は、どうしても後回しにされがちです。また、一部の国では女性が人前で肌を見せることが禁じられているなどの理由で、服装に制限のある状態で競技に参加せざるを得なかったり、時には競技への参加自体が不可能だったりすることがあります。水泳は、まさに女性の参加が制限されやすい種目の代表です。そうした文化を否定するのではなく、尊重しながら、世界中の女性アスリートを支えていきたいと考えています。

スポーツを通して世界を経験することは、私にさまざまな学びと、多くの友人を与えてくれました。今では日本と世界の交流により、世界各地にルーツを持つ多くの選手が日本に育ち、新しい可能性を生み出しています。スポーツを通じた国際交流で国を発展させ、人々をつなぎ、新たな道を開く。日本の国際協力が、今後も日本と世界の発展の一助となることを願ってやみません。



©Shinichi Kuno

#### すずき・だいち

1967年3月10日生まれ。88年、ソウル五輪の競泳男子100m背泳ぎで金メダルを獲得。日本水泳界の復活に貢献した。引退後は解説者、指導者、研究者として、多方面で活躍。日本オリンピック委員会理事、日本水泳連盟会長などを歴任した。2007年に博士（医学）を取得。

from  
ソロモン  
諸島



ロスフェロ・シオシ選手/  
陸上・長距離

- ①2015年パシフィックゲームズ 10000m金メダル、5000m銀メダル
- ②常に全力を出すこと
- ③世界の強豪選手たちと戦い、自分も世界的な選手の一人になりたい

シャロン・フィリスア選手/  
陸上・長距離

- ①2015年パシフィックゲームズ 10000m金メダル、ハーフマラソン金メダル
- ②仲間と共に常に自分に挑戦する気持ちと、勝者になりたいと思う気持ち
- ③自己ベストを出して、自分のレースを全うしたい

## リオ五輪にかける!

藤山 直行さん (青年海外協力隊OB)

1990年から青年海外協力隊としてソロモン諸島の子どもたちに体育を教えました。その後、機会があってナショナルチームの指導に携わることになり、現在は同国のオリンピック協会に所属しています。陸上の指導を始めた当初は人数がそろわず、雨の日は一人グラウンドで選手を待つこともしばしば。でも選手たちは少しずつ陸上を好きになり、しっかりと練習に向き合うようになりました。フィリスア選手とシオシ選手は、ともにリーダーシップがあり、他の選手を引っ張ってくれる存在です。2人には、人々に夢を与えられるような選手になってもらいたいです。



フィリスア選手の練習風景。スパイクシューズは高価なので、靴底が剥がれたら縫い合わせて使っている

アスリートなら誰もが憧れるオリンピック。世界各国で練習に励む選手たちを、JICAボランティアやボランティア経験者らが力強くサポートしている。オリンピックでの活躍を誓う選手と指導者を紹介しよう。

特集スポーツ  
人をつなぎ、国をつくる

# 二人三脚で挑む! 世界最高峰の舞台へ

## リオ五輪にかける!

江口 吹樹さん (青年海外協力隊)

小さいころから柔道一筋だった私は、昨年2月から青年海外協力隊としてサモアで柔道を指導しています。到着後、初めて現地の柔道教室を訪れると、体重160キロを超えるひととき大きな男性が子どもたちに柔道を教えていました。それがスア選手でした。サモアには彼の練習相手となるような同じ体格とレベルの選手がいないため、一緒に子どもたちを教えながら、スア選手の指導にもあたっています。体重差100キロ近くある選手に、指導者として負けれられないのは正直大変ではありますが、オリンピックまでの残り数カ月間を二人三脚で戦っていきたくです。



子どもたちは、江口さんを奪い合って練習をしたがる

from  
サモア



デレク・スア選手/柔道

- ①2015年オセアニアチャンピオンシップ 銅メダル
- ②サモアが誇る強じんな筋肉
- ③吹樹先生に対する感謝の気持ちを勝利という形でプレゼントしたい

アレクサ・モレイラ選手/  
陸上・走り幅跳び

- ①2014年ジュニア南米選手権 金メダル
- ②いかなる場面でも集中できること、トレーニング後の回復力
- ③2019年のパンアメリカン競技大会をしっかり戦い、東京オリンピックに出場したい

from  
ペルー



## 東京五輪にかける!

椿原 孝典さん (シニア海外ボランティア)

※写真右から3人目

かつて青年海外協力隊として陸上の指導に携わった私は、昨年、シニア海外ボランティアとして約30年ぶりにペルーを訪れました。当時の教え子たちは今では立派なコーチとなり(写真両端)、3人の選手たちと一緒に指導しています。コーチの元コーチである私に対し、選手たちは若干複雑な思いを抱いたようですが、コミュニケーションを密にしながら練習を重ねるうちに、すぐに信頼関係を築くことができました。オリンピックという大舞台に挑戦できる環境下にいる選手たちには存分に楽しんでもらいたいし、私もそのための支援は惜しまないつもりです。



モレイラ選手を指導する椿原さん。1年間のリハビリを経て、けがからの復帰を遂げたモレイラ選手は、自信がよみがえったような顔付きに変わったという

from  
カンボジア

## 東京五輪にかける!

土谷 龍一さん (シニア海外ボランティアOB)

2012年にカンボジアに派遣された際、まず驚いたのが、20年以上前の古いカヌーと、手作りの木製パドルが使われていたことです。選手には道具を購入するお金はないので、まずはアジアカヌー連盟に働き掛けて6艇のカヌーと最新のパドルを贈呈してもらい、練習環境を整えました。選手とは、時間を守る、うそをつかない、真面目に練習するなど、ごく当たり前の約束事を交わり、私自身も毎日時間通りに顔を出して信頼関係を築いてきました。目標は高ければ高いほどやりがいがあります。一つ一つの積み重ねが、必ずや夢の実現に近づくと思っています。



セメントをバケツの型に流し込んだ手作りのバーベルは土谷さんの発案だ

選手プロフィール  
①主な成績 ②自身の強み ③オリンピックにかける意気込み

ボン・ナルン選手/カヌー

- ①2016リオデジャネイロ五輪アジアカヌー予選競技会 準決勝進出
- ②スタートダッシュが得意、弱音を吐かない
- ③まずは東南アジア、次にアジアで一番になり、東京オリンピックの代表権をつかみたい

ボンナ・ラデー選手/カヌー・カヤック

- ①2016リオデジャネイロ五輪アジアカヌー予選競技会 準決勝進出
- ②スタミナとパワーがあり、ラストパートが得意
- ③土谷先生の厳しい練習に耐えて、4年後の東京オリンピックには必ず出場したい

活躍してきた。大学卒業後、柔道に関わり続ける道考えたとき、試合で海外を訪れた経験や、協力隊OBだった高校の先生を思い出して、協力隊への参加を決めたという。

派遣先はモンゴルのナショナルチーム育成を行う柔道連盟。「最初の稽古の日は、モンゴルの選手に投げられたら帰国するという覚悟で向かいました」と堀田さんは振り返った。「自分より弱い相手に教えられたくはないだろうと思ったのです」

堀田さんが秘めていた覚悟を、ツァガンバートル選手は知らなかつたという。それでも、「彼は、いつでも選手たちと共に稽古できるような努力を重ねていました。決して負けないという覚悟は、私たちにも分かりましたよ」と答えた。

堀田さんから見て、モンゴルの選手にはモンゴル相撲に通じる力強さや「固さ」があるという。一方、堀田さんが考える日本の柔道は、「柔よく剛を制す」。モンゴルの選手の力を底上げするには、当時彼らが苦手としていた寝技などの技術面を強化することが重要と考えた。「相手の力を利用して少しの力で投げるのが、柔道の技の面白いところ。モンゴル人選手は力強さと、日本柔道の技が融合すれば、とても強くなると思います」と堀田さんは語る。

## 草原を拓く柔の道

近年、多くの力士を輩出しているモンゴルでは、格闘技が人気のスポーツだ。日本のお家芸・柔道の人気も高いが、その背景には長年にわたる交流があった。

写真(13ページの稽古の写真を除く) 関健作(写真家)



### 蒼穹の国の英雄 支えたのは日本の青年

ハシバートル・ツァガンバートル選手はモンゴルの英雄だ。2005年のアジア柔道選手権、06年のアジア大会で優勝。09年には世界選手権も制した。現在、モンゴルの柔道ナショナルチームコーチ

を務める彼の写真は、モンゴル中の学校の体育館に飾られている。ツァガンバートル選手が04年のアテネ五輪に出場したとき、ウランバートルからその姿を見守っていた日本人がいた。青年海外協力隊員として派遣された、堀田篤さんだ。堀田さんは小学校5年生で柔道を始め、大学まで選手として

モンゴルの英雄となったツァガンバートル選手。日本選手と戦って引けを取らない技術は、青年海外協力隊から学んだ



### 共に鍛え、技を磨く 幾多のメダルが成果に

アテネ五輪で銅メダルを獲得したツァガンバートル選手に、さらなる技術を指導したのが、09年からこの国で活動した小倉大輝さんだ。堀田さんから日本の柔道の基礎を学び、小倉さんから新しい技術を学んだツァガンバートル選手は、「国際大会では、伝統ある日本の選手はやはり高い壁です。私は寝技の技術を学ぶことで、日本



アマルトゥブシン選手(右)が挑む60kg級は、モンゴル選手が世界上位10人中4人を占めるお家芸の階級で、代表争いもひとときわ激しい

選手に負けにくくなったと思います」と語った。

小倉さんは柔道国体選手の父を持ち、4歳で柔道を始めた。大学4年の全国大会前に骨折し、不完全燃焼に終わった小倉さん。柔道で世界に貢献し、なおかつ自身身を磨くために、軽量級柔道の強さで名高いモンゴルを任地に選んだ。

モンゴルの選手たちは幼い頃から乗馬やモンゴル相撲で鍛えられ、国自体が高地にあることから



ブドマー選手(左)も現在、リオ五輪を目指す選手の一人だ。国内選考を前に、練習にも気合が入る

国のトップ選手が鍛錬を重ねるウランバートルのスポーツ宮殿。柔道場には、毎日100人近くの選手が集まり、汗を流す



モンゴルの柔道家たちは、私たちの強さを聞かれて異口同音に「モンゴル相撲ゆずりの、相手の懐深くをつかんで投げる技術」と答えてくれた。堀田さんは、「その上、普通なら投げられてしまうような体勢になっても耐えたり、思いも付かない方法で技を掛けてきたりする、一筋縄ではいかない力があるんです」と語る。

こうした強さに技術が加われば、もっと強くなる。そう強調するのは、現在、モンゴル第二の都市ダルハンで柔道を教えている星

次の世代の育成へ  
受け継がれるきずな

バトエルデネ・バトガマアラランさんとハンガル・オドバートルさんは、かつて小倉さんに連れられ、講道館に2週間遠征したことがある。「あの研修で自分が強くなれると実感し、ハンガルと話し合っ

て、日本に留学したいと両親に頼んだんです」というバトエルデネさん。ハンガルさんが副将として二人抜きを決めるなど、優勝に大きく貢献した。1年後輩のガンエルデネ・オリギルさんも、「友人が活躍したのはとてもうれしい」と話す。スポーツ新聞各紙が「柔道にもモンゴル旋風」と報じた期待の3人は、日本での大学進学と、東京オリンピックへの出場を目指している。



森田さん(左)の指導を受けるバツェルンさん(左から二人目)。男の子を相手に引けを取らない強さは本物だと、森田さんも一目置いている

モンゴル国内で活躍する  
スポーツ分野の青年海外協力隊員

柔道 2人  
体育 4人  
バレーボール 6人

モンゴルでの協力隊活動は柔道にとどまらない。体育やバレーボールなども盛んだ。

(2016年6月現在)

山幸美さんだ。首都ウランバートルから、北に220キロ。青年海外協力隊の一員としてダルハンという町の柔道連盟に派遣された星山さんのもとを訪れると、全国大会を目指して稽古に励む地元若者たちと共に汗を流していた。

人助けや海外での生活に興味があった星山さんは、協力隊OBだった知人に発覚されて21歳で協力隊に参加。十代を中心とした約100人のジュニア層に柔道を教えている。「この生徒たちは皆、柔道を楽しんでくれています。私自身も厳しい訓練を受けてきて、時にはつらいこともあったので、子どもたちには楽しみながら上手になってほしいと思っています」

「小さなミスでもすぐに見つけて、技が身に付くまで丁寧な教えてくれる」と星山さんを慕っている。星山さんも生徒たちに刺激を受け、日本に帰ったらまた試合に出たいという気持ちで新たにしている。

ダルハンからさらに西に400キロ。ロシア国境に程近い山岳観光の拠点ムルンの体育学校では、森田直也さんが朝の8時半から子どもたちの指導に当たっていた。この学校で柔道を教える初めての日本人となった森田さんは、モンゴル人選手の柔道はもともと鍛えられた力が土台にあり、技を見せるとまねるのが上手い、と教える

たちを評価する。見よう見まねで覚え、形が崩れてしまった技を、正しい形に一つ一つ直してあげる森田さん。今の目標は、間近に控えた大会で教え子が一人でも優勝してくれることだ。

男の子が多い中で、特に元気よく稽古に励む少女がいた。親戚にモンゴル相撲の三役がいるというバツェルンさんは、幼い頃のブンドマー選手と同様、周りの男の子と一緒によくモンゴル相撲を楽しんでいるという。「私、強いと思うの。柔道を始めたのは3月からだけど、いつかはオリンピックで金メダルを取りたい」と屈託のない笑顔を見せた。

(編集部 近藤ゆふき)

星山さん(右)は子どもたちに寝技なども教えている。投げ技などの派手な技が好まれるモンゴルで、寝技の技術は一目置かれるという



星山さんがジュニアを教えるダルハンの体育館。壁にはさまざまな競技の図に並んで、民族の祭典ナードムで行われる相撲、乗馬、弓術の壁画があった

心肺能力も高い。小倉さんは選手たちと共に自らを鍛えつつ、寝技の指導やルール改正に応じた技術の更新などを積極的に行った。代表チームの国際大会にも数多く帯同。09年のパリ世界ジュニア選手権では、チームが予約したホテルが全てキャンセルされるというトラブルに見舞われたが、ダワードルジ・トゥムフレグ選手が銀メダルを獲得して喜びを分かち合った。

そんな小倉さんのモンゴルでの教え子兼打ち込みパートナーだったのが、13年にリオデジャネイロの世界選手権で銀メダルを獲得したダシダワー・アマルトゥブシン選手。トゥムフレグ選手と同じ60kg以下級で、大舞台にはなかなか上がれなかったが、毎日満員のバスに乗って稽古に通ってきた努力家だ。「稽古を始めた頃は、自分

が世界大会に出られるとは思いませんでした。全ては小倉さんとの日々の鍛錬のおかげです」というアマルトゥブシン選手。世界選手権の銀メダルや国民栄誉賞の受賞時も、国際電話で小倉さんに連絡したという。

「アマルトゥブシン選手と小倉さんはいつも一緒に稽古していて、本当に仲の良い親友でした」と語るのには、自らも堀田さんや小倉さんに指導を受け、06年と10年のアジア大会銀メダルなどの記録を持つムンフバートル・ブンドマー選手だ。女の子には珍しく、小さい頃から男の子に混じってモンゴル相撲を楽しんでいたブンドマー選手は、中学で柔道を始め、高校卒業時に女性選手でも活躍できる柔道を選択することを選んだ。「日本の指導者は、ただ見てくれるだけでなく、選手と一緒に技の掛け方や対策などを教えてくれます。二人のおかげで、新しい技もたくさん身に付けることができました」というブンドマー選手。他の選手たちと共に、リオ五輪でのメダルを目指している。

一方、祖国を離れて日本を目指した若者たちもいる。今年の全国高等学校柔道選手権大会・男子団体戦で優勝した、日本体育大学在学原高等学校柔道部。放課後、部活に励む生徒たちの中に、3人のモンゴルからの留学生がいた。

ようやく春を迎えたモンゴルの草原を青空が覆う。「久遠の蒼穹の国」の名はモンゴルの美称でもある





レクリエーションレースを体験した現地の体育教師ら

教師4人や教科主任にも授業の改善方法などを提案している。しかし、変化を促すのは簡単ではなかった。体育担当の教師4人のうち2人は、体育が専門ではなく他教科兼任の教師だったため、そもそも指導のモチベーションが低いことも壁になっていた。

**授業の幅を広げたい  
教師のスキルアップの場を**

国土が比較的小さいウガンダでは、各地で体育に関する活動をすすめる協力が集まり、共同で運動会などを企画・実施することが珍しくない。今年3月には、ナビンゴ校を会場に体力測定会を共同開催する計画があった。しかし、新立

さんの胸には、体育教育の定着には、生徒対象のイベントだけでなく、教師向けのアプローチが必要なのでは、という思いがあった。共同イベントなら各校から多くの教師に参加してもらえらる。この機会を生かし、体力測定会から教師向けのワークショップに内容を変更することを新立さんが提案すると、他の隊員も賛同。それぞれの配属先の教師に参加を呼

び掛けると、予想を上回る反響があった。こうして、ワークショップの開催が決まった。

企画の内容は、体育教育の目的についての講義、実技講習、グループディスカッション、生徒を交えた交流試合の4本柱だ。協力が一方的に講義するのではなく、現地の教師が主体的に関わることで、横のつながりを深めたり、情報交換の場としてほしいと考え、講義の一部は配属先のロバート先生に頼んだ。「準備段階から積極的に協力してくれた彼は、身体能力の向上にとどまらず、子どもの心の発達にも役割を果たすという体育教育の意義を熱く語ってくれました」と新立さんは同僚の活躍を喜ぶ。

新立さん自身は、司会進行役と実技講習を担当し、レクリエーションを紹介した。ワークショップに参加した現地の教師ら12人が顔を合わせるの、当日が初めて。最初は緊張した面持ちだったが、実技講習を通じて二人三脚や後ろ走りリレーなどに初めて挑戦すると、自然と笑顔がこぼれた。参加

者は、「チームワークの重要性を体感できた」「授業の新しいアイデアを得られた」と話し、良い刺激を得たようだ。

その後のディスカッションでも、活発に意見を交換し合う教師らの姿があった。体育の課題は他校とも共通点が多いことを知った参加者たちは、互いに共感し、解決法について真剣に話し合っていた。

「当日は、配属先の副校長も見に来てくれたんです。日々、試行錯誤しながらの活動ですが、今回の経験で、体育担当の先生たちとの距離が一層縮まり、配属先とも良い関係を築いてこられたことを再確認できてうれしく思いました」。

そんな新立さんには、ハンドボール部の指導というもう一つの期待も寄せられている。ナビンゴ校には、もともとハンドボール部はなかったが、放課後、興味のある生徒に教えてみたのが始まりだった。「まだまだ、やる気やレベルの差はありますが、特に真剣に取り組む生徒の間では、信頼関係やリーダーシップの意識が芽生えています。継続することの重みも実感し始めているようです」。

7月の全国大会で勝たせてあげたい。そう願う新立さんの下で、生徒たちはスポーツを通して、自信や物事に取り組む姿勢という人生の大きな財産を得ている。



[右]2年生の授業で、2人組になって行うストレッチの方法を指導した  
[左]ハンドボール部の指導の様子。放課後、遊びの延長で教え始めたが、部活として継続して指導を続け、試合の経験を重ねてきたことで今は格段に上達している



体育教育の目的についての講義を担当したロバート先生

アフリカ東部の内陸国ウガンダで体育の授業が導入されたのは、わずか5年前の2011年のことだ。同国スポーツ教育省が、日本の中等学校にあたるセカンダリースクールに体育を導入することを決め、同時に全国32の公立学校を「スポーツ推進校」に指定した。

首都カンパラに隣接するワキンソ県のトリニティ・カレッジ・ナビンゴ校（以下ナビンゴ校）もそのうちの1校だ。1〜6年生の約1500人の生徒が学ぶ同校は、1942年創立の女子校で、国内屈指の進学校。医師などとして活躍する女性を輩出してきた。

スポーツ推進校に指定されたナビンゴ校だが、体育という新しい教科を実践する環境は十分に整っていなかった。「1クラスの人数はおおよそ80人。一人で指導するには多すぎます。一方で、ボールは5個しかないなど用具が不足しているため、ほとんど活動に参加しないまま授業を終える生徒も少なくありません」。そう話すのは、おとし7月から青年海外協力隊として同校で体育を指導している新立みずきさんだ。

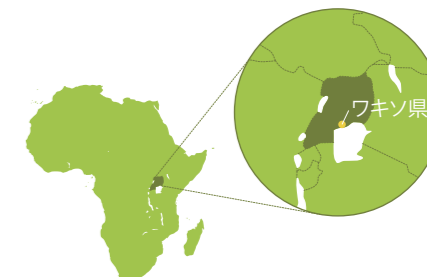
幼いころから野球やハンドボールなどに親しんできた新立さんは、大学で運動生理学を専攻し、

「チームワークや協調性を育てることもレクリエーションレースの目的の一つ」とワークショップで教師らに解説する新立さん



## 体育教育を担う 教師らに思いを託す

ウガンダの学校では、体育はまだまだ“新しい教科”だ。生徒にスポーツの楽しさやそこから得る学びを体感してほしい。そんな情熱を胸に、現地の学校で体育教育の意義を伝え、教師らの指導力向上を支える青年海外協力隊がいる。





障害者リハビリテーションセンターの子どもたちと本間さん。みんなプールの時間を待ちわびている



一人でプールの中を歩けるようになるために、日々練習を重ねた

にある特別支援学校の体育の授業を改善することですが、大会に出場する選手に専門的な指導を行える人がいないという理由から、私が声がかかったのです。」  
週に1度、筋力トレーニングやフォームの確認などを一緒に行うことにしたが、リケット選手が経済的な理由で練習場所まで来られないことや、当日までにやるように伝えた練習メニューをこなせていないこともあった。「ジャマイカでは、指導者と選手の上下関係は日本よりも明確です。でも私は、選手のチャレンジ精神を奮い立た

せるようなコーチでありたかった。で、叱り付けはせず、もっと速く走りたいんだろ？あなたならできる」という言葉を常に投げ掛けました」と古川さんは話す。  
お互いの信頼関係を築きながら着実に練習を積み重ねていったが、大会本番、連日のレースによる疲れが原因で、リケット選手がけがをする事態に。取り乱してしまつた選手を救つたのは、古川さんだった。「誰の言葉にも聞く耳を持たない中、私の話だけは聞き入れてくれたのです。とりあえず彼を落ち着かせて、応急処置を施しました」。その日行われた100mと200mは、いずれもメダルには届かなかつたが、翌日のリレーでは負傷した体でアンカーを務め、最後に2人を追い抜いて銅メダルを獲得した。古川さ

海に囲まれたジャマイカだが、一般的に泳げる人は少ない。本間さんは、泳ぎ方を実演したり補助用具を使ったりしながら、基礎的な部分から指導した。中でも、水中カメラを使ったフォームの撮影は、選手が改善すべき点を自分の目で見て確認できるため、効果が

一方、首都キングストンでは、同国パラリンピック協会に所属し、障害者のリハビリテーションセンターで水泳を教える青年海外協力隊員がいる。2歳のころに水泳を始め、指導経験も豊富な本間隆暉さんだ。東京パラリンピックに選手を輩出するという目標の下、選手とコーチの育成に取り組むことになったが、初めて施設を訪れた日に、驚きの光景を目の当たりにする。「プールは私が来る1年前から全く利用されておらず、緑の池と化していました」。まずはプールの掃除と水質管理を行うという、まさに一からのスタートとなった。

2020年の東京パラリンピックでは、ジャマイカから新たなスター選手が誕生するかもしれない。

指導を始めてから1年余り。本間さんにしがみついて離れなかつた子どもが、一人で水中を歩けるようになったり、浮具が無くてもバランスを保てるようになったりと、目に見える成果が表れ始めている。利用者も増え、今では週に1度、理学療法士によるプールでのリハビリも行われるようになった。「私の任期が終了した後、選手を育成できる環境を作ることが目標です。そして何より、多くの人に水泳の楽しさを伝えたいと思います」と本間さんは話す。

本間さんが着任した当時のプールの様子。このプールをよみがえらせることから始まった



陸上のリケット選手にストレッチを行う古川さん

## カリブ海の島国から 世界に羽ばたく

ジャマイカでは、陸上や水泳をはじめとするさまざまな種目の障害者アスリートたちが、大舞台での活躍を目指して日夜練習を重ねている。そんな彼らを支える心強い存在が、スポーツの素晴らしさを伝えるべく派遣された青年海外協力隊だ。

### 選手を支えたものは 強固な信頼関係

世界屈指の陸上王国、ジャマイカ。100mと200mの世界記録を持つウサイン・ボルトは、国内のみならず、今や世界的な英雄となった。実はジャマイカでは、障害者スポーツにおいても陸上は特に人気がある。これまでも数々の選手をパラリンピックに輩出しているほか、スポーツを通じた障害者の社会参加を応援する組織「スペシャルオリンピックス」の世界大会でもメダルを獲得してきた。

昨年は、4年に1度のスペシャルオリンピックス夏季大会の開催年。この大会で金メダル獲得を狙っていたのが、21歳の若きスプリ

んは、「リケット選手との練習でも、特別支援学校の体育の授業でも、できることが増える瞬間に立ち会えるのはうれしいものでした。今後は、日本でもさらに特別支援教育の経験を積みみたいと思っています」と目標を語る。  
**将来のある子どもたちに  
スポーツの楽しさを**

大きかったという。

未来のスイマーを育てるため、6〜14歳の子どもたちへの指導も行っている。練習は、学校の授業と理学療法士によるリハビリ後の限られた時間のみ。それに加え、安全面から一度に指導できる人数も限られるため、なかなか思うようには進まない。だが本間さんは、今後10年、20年と指導が続いていくための基礎作りとして、焦らずに時間をかけて教えることを心掛けていくという。「指導していて感じるの、みんなプールが大好きだということ。大雨の日でも、子どもたちは私を見掛けると、今日はプールある？と聞いてくるほどです」。



古川さんが赴任した特別支援学校での体育の授業。この日は、玉入れをして遊んだ



座談会

# シリアに笑顔を一スポーツとともに生きる

スポーツには、笑顔や仲間意識を生み、フェアプレーの精神から規範や公平性を重んじる心を育てる力がある。近年、大きく揺れるシリアは、これまで体育・スポーツ分野の青年海外協力隊が最も多く活動してきた国だ。隊員OB・OGが、今の思いを語った。



**シ**リアでは、どんな活動をしていたのですか？

**向井** 1984年1月から2年間、陸上競技連盟に配属され、首都ダマスカスで陸上競技を教えていました。87年に地中海沿岸諸国の国際大会が予定されていたので、それに向けて、400mハードル走を中心に、20代の代表選手の強化を担当していました。

**三角** 私は、2010年からシリアにあるパレスチナ難民キャンプの小中学校で体育を教えていましたが、その翌年に「アラブの春」と呼ばれる民主化運動が起き、その影響で治安が悪化しました。やっと活動が軌道に乗り始めたころでしたが、やむを得ず11年4月にいったん帰国し、8月からはヨルダンのパレスチナ難民キャンプで体育を教えました。2年3カ月の任期を終えて帰国した後、短期ボランティアとして再びヨルダンのシリア難民キャンプでも活動しました。

**仮屋** 私は1998年から3年間、ホムスという地方都市の柔道協会に所属して、選手の強化と市民への柔道普及に取り組んでいました。ホムスの人たちは冗談が好きで、遠征に行くバスの中でも、選手たちは延々と小話を披露し合っては笑っていましたね。

**三角** シリアには陽気な人が多いですね。ダラアは方言が強いのですが、日本人の私が方言で話すのが面白いらしく、よく教えられました。ダマスカスで使うと、みんな笑ってくれて受けが良かったですよ。

**仮屋** 復興の準備が整ったときに、いつでも協力できる自分でありたいということも常に考えています。協力隊時代、現地の女子柔道のコーチが、練習後の道場でアラビア語を一から教えてくれました。それを笑いながら見ていた子どもたちが、私が教科書を学び終えたときに手作りの賞状をくれたりと、楽しい時間でした。私は今、公益財団法人講道館の国際部で働いていますが、彼らのおかげで、アラブの人々が来たときに、今もアラビア語で会話が出来るんです。なんて大きなプレゼントをもらったのだらうと胸が熱くなります。

**向井** シリアの人々は温かいですね。私がまだアラビア語に慣れないころ、自宅に帰るときに行き先の違うバスに乗り、終点まで行ってしまったことがありました。不安で、とにかく運転手に家の住所を連呼すると、事情を察した彼はアパート前までバスで送ってくれました。そんな心優しい人々が今、危険にさらされていると思うと、腹立たしい気持ちになります。とにかく、早く安定を取り戻してほしいです。

**三角** 笑顔は生きる力になります。彼らに寄り添う中

**ス**ポーツを通してどんなことを伝えましたか？

**仮屋** 続けることです。シリアの人は、飽きっぽいところがありますからね。練習の前に道場を掃除するとか、地味なことをコツコツ続けるって大切だと思うんです。2年くらい前、内戦で国外に避難した教え子が、「先生が教えられたこと、覚えてるよ」とメールをくれました。無事で安心したし、うれしかったな。柔道って、何回投げられても立ち上がるのが大事なんです。その稽古で困難に立ち向かう力を養います。そうしたことも少しは伝えられたのかもしれない。

**向井** 私の場合は、まずは結果を残すことですね。あの選手は長距離・マラソンの素質はあったものの、指導者がいなかったんです。そこで、指導を担当したところ、シリアの国内記録を更新するまでに育った例がありました。アラビア語は苦手でしたが、それでも、指導中は拙い会話やボディランゲージで、気持ちは十分通じましたね。

**三角** シリアでは多くを伝えられませんが、ヨルダンのシリア難民キャンプで子どもたちに伝えたのは、「ルールを守ること」です。ずるをして勝つのではなく、みんなで協力して、正々堂々とプレーした先にスポーツの面白さがあるのだ、と。スポーツイベントで子どもたちが、「負けちゃったけど、ルールを守

ってそう実感してきました。困難なときこそ、楽しい時間が必要であり、スポーツの持つ力が発揮される場面があるのだと思います。子どもたちが生き生きと走り回り、その傍らで大人たちがのんびりとお茶を飲みながら笑顔で見守っている。そんな日常が一日も早く戻ることを心から願っています。

**今**のシリアの現状をどのように感じていますか？

**仮屋** 僕たちが活動していたころは、少なくともスポーツができるくらい社会は安定していました。まずは教え子たちに無事でいてほしい。また柔道をしたい、その気持ちが生きるモチベーションになっていければと願っています。

**三角** 私は内戦後にヨルダンに逃れてきたシリアの人たちを見てきました。彼らは持ち前の明るさを失くしてはいませんが、ふとした瞬間に、子どもたちが心に負った悲しみを伝えてきたり、母親が私のひざで涙を流したりすることがあり、葛藤の中で活動を続けていました。誰もが悲しい思いをしているのだと思います。運動会を開いたときに、「今日は、思い切り楽しんで子どもたちから、家族に、そしてキャンプ全体に笑顔が広がるね」と同僚が言葉を掛けてくれたの

が忘れられません。復興の準備が整ったときに、いつでも協力できる自分でありたいということも常に考えています。協力隊時代、現地の女子柔道のコーチが、練習後の道場でアラビア語を一から教えてくれました。それを笑いながら見ていた子どもたちが、私が教科書を学び終えたときに手作りの賞状をくれたりと、楽しい時間でした。私は今、公益財団法人講道館の国際部で働いていますが、彼らのおかげで、アラブの人々が来たときに、今もアラビア語で会話が出来るんです。なんて大きなプレゼントをもらったのだらうと胸が熱くなります。

**向井** シリアの人々は温かいですね。私がまだアラビア語に慣れないころ、自宅に帰るときに行き先の違うバスに乗り、終点まで行ってしまったことがありました。不安で、とにかく運転手に家の住所を連呼すると、事情を察した彼はアパート前までバスで送ってくれました。そんな心優しい人々が今、危険にさらされていると思うと、腹立たしい気持ちになります。とにかく、早く安定を取り戻してほしいです。

**三角** 笑顔は生きる力になります。彼らに寄り添う中

## 世界で一番新しい国「南スーダン」とスポーツ

2011年7月9日、スーダンから南スーダン共和国が分離・独立した。しかし、独立後も民族間の衝突が絶えず、13年12月から内戦が続いている。民族間の融和が急がれる中、平和な国づくりに役立つものとして南スーダン政府が期待を寄せるのがスポーツの力だ。

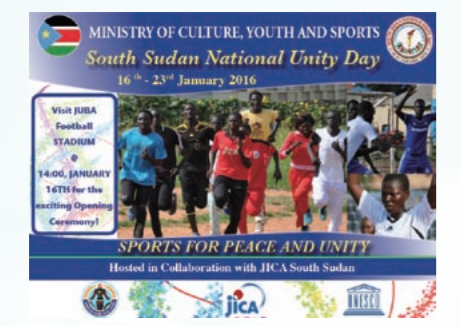
今年1月、南スーダンの首都ジュバで、独立後初の公式スポーツ大会となる「ナショナル・ユニティ・デー」が、1週間にわたって開催された。社会統合の象徴としてスポーツ大会を開催したいと考える同国政府が、JICAに支援を要請して実現したものだ。文化・青少年スポーツ省の指揮の下、南スーダンのオリンピック委員会の呼び掛けに、同国サッカー連盟と陸上連盟が協力。各州から集められた代表選手と中高生、それに関係者を合わせ、およそ400人が参加する大会となった。

南スーダンでは、内戦の影響で主要な幹線道路が利用できない区間もあり、地方部の人々が首都に足を運ぶことは簡単ではない。物理的な障壁に加え、ある州の中高生を指導するコーチは、「他の州に行くに命が狙われる」と言って、参加を断念した子どももいます」と、民族間の溝の現状を語った。

白熱したサッカーの試合では、リーグ戦の勝ち点が同じ場合、決勝トーナメントに進出するチームをどのように選出するか事前に通知されていなかったため、苦情や不満が噴出。急きよ、各チームのコーチが集められた。2時間に及ぶ話し合いの末、国際サッカー連盟(FIFA)のルールに準拠した選出方法を採用することで決着し、最終的には皆が納得するかたちで試合再開に至ったのだ。

スポーツを通じた平和構築の専門家として、この大会の開催に協力してきた大阪大学大学院人間科学研究科の岡田千あき准教授は、「スポーツには、民族融和を促し、平和を可視化する効果が期待されています。今回の大会では、関係者らがルールに従い、民主的な方法で問題の解決策を導き出していました。まるで、政治の場での平和構築のプロセスが再現されているようでした」と話す。

文化・青少年スポーツ省の幹部は、選手や中高生らに、「一人一人が大使として、大会での経験を各地に持ち帰ってほしい」と強く訴えた。



ナショナル・ユニティ・デーのポスター。大会の様子は、国の新聞にも大々的に取り上げられた



**仮屋力** ● かりやちから  
1998年7月～2001年7月、シリアの地方都市ホムスでナショナルチーム入りを目指す選手を中心に柔道を指導



**三角梢恵** ● みすみこずえ  
2010年9月から約5カ月間、シリア南西部ダラアのパレスチナ難民キャンプにて、小中学校で体育を指導。治安の悪化による本邦退避を経て、11年以降、ヨルダンのパレスチナ難民キャンプで活動した後、短期ボランティアとしてシリア難民キャンプで活動



**向井啓司** ● むかいけいじ  
1984年1月～86年1月、首都ダマスカスで国際大会出場を目指す選手に陸上競技を指導



練習中は、技術面だけでなく精神面において大切なことも繰り返し伝えた



2013年のWBC(ワールド・ベースボール・クラシック)で、黒木さんはブラジル代表のバッティングコーチを務めた

# PLAYERS

国際協力の担い手たち

## 日本体育大学

### 世界に貢献できる人材を

スポーツを愛する学生たちが集まる、日本体育大学。大学が擁する豊富な人材や知見は、開発途上国におけるスポーツの普及・振興の面からも期待されている。スポーツを通じて、大学国際化の最前線を取材した。



### 野球が人生を変えた

体育・スポーツの総合大学として、多くのアスリートや体育教員、スポーツ科学者らを輩出してきた日本体育大学に、おとし8月、「国際交流センター」が新設された。目的は、大学が掲げる基本方針の一つである「国際化」を踏まえて、交換留学やJICAボランティアの派遣などを推進し、グローバル社会で活躍できる人材を育成することだ。

「留学や国際協力に関心を持つ学生



バッティングの指導を行う黒木さん(左)。子どもたちとの信頼関係を築くために、個人ノックを頻繁に行ったという

### 次の芽を育てるために

まず照準を合わせたのは、コーチ任から5カ月後の全国大会。黒木さんは技術的な指導に加えて、練習は手を抜かない、道具は丁寧に扱う、グラウンドを整備するといった礼儀や態度の面も指導したが、1カ月が過ぎたころある壁に直面する。グローブを投げたからグラウンド1周など、黒木さんが決めたルールに子どもたちが耐えられなくなり、13人のメンバーのうち3人しか練習に来なくなったのだ。それでも、自分の信念を曲げなかった黒木さんの根底にあったものは、やはり野球だった。「高校時代に自分が目指す打撃フォームが正しいのか悩んでいたとき、父親の『三振でもいいから

は、年々増えています」。こう話すのは、同センター職員の黒木豪さんだ。今は、学生の背中を後押しする黒木さんだが、実は自身も日系社会青年ボランティアに参加して、ブラジル・サンパウロで野球を指導した経験を持つ。

今をさかのぼること7年前。日本体育大学を卒業後、体育教員を志していた黒木さんは、当時、非常勤講師を務めていた横浜市の中学校で、生徒との関わり方について悩んでいた。「生徒の思いもよらない発言や行動にどう対応すべきか分からなくなったとき、先輩教員からのアドバイスはいつも目から鱗が落ちる内容でした。自分も今までの価値観をひっくり返すような経験を積み、教員としての幅を広げなければ」と強く感じるようになったのです。経験を積める場として、そして6歳から続けてきた野球を生かせる場として、ブラジルへの派遣は絶好の機会だった。

200万人近くの日系人が暮らす同国では、さまざまな日系人コミュニティの中で、黒木さんが派遣された町のチームには70人ほどが所属していた。「私は13〜14歳の子どものコーチを任せましたが、練習中は失敗してもみんなヘラヘラと笑っていて、試合ではコールド負けが当たり前。それを見たとき、厳しい練習を乗り越え、結果が出たときの喜びを分かち合うという、野球の本当の楽しさを伝えようと心に決めたのです」と黒木さんは振り返る。



JICAボランティア事業の連携に関する覚書を交わす、日本体育大学の谷釜了正学長(右)とJICA青年海外協力隊事務局長の小川登志夫局長(左)

お前の野球をやれ」という言葉に支えられました。自分が信じたことは曲げない。隊員時代の私にとってそれは、野球の本当の楽しさを知ってもらったことでした。そして、その思いは伝わった。練習に参加し続けていたメンバーが見る見る実力を付けていく様子を見て、他の子どもたちも戻ってきたのだ。

迎えた全国大会。約30チームが出場する中、黒木さんのチームは以前と見違えるようなプレーを見せ、初の決勝リーグ進出を決めた。その後の準々決勝で、優勝候補のチームに敗れてしまったが、子どもたちは最後まで諦めずに戦い抜いた。「今までは負けても全く気にしていなかった子どもたちが、試合の後、みんな悔しそうに泣いていたのです。指導する立場の私の方が、忘れてかっていた野球の素晴らしさを改めて学んだ気がしました」と黒木さんは話す。

現在は、国際交流センターを訪れる学生の相談に乗っている黒木さん。学生にとっては、実際の経験に基づいたアドバイスが受けられるため、心強い存在だ。「実際に現地に行くことで、自分の無力さにも気付かされますが、その中で何ができるのかを必死に探し出す経験は学生を大きく成長させます」と黒木さんは話す。学生が特に心配する現地での生活や、帰国後の進路についても、親身に相談にのっている。おとし8月には、JICAとの間



JICA短期ボランティアとしてブラジルに派遣された学生たち

でボランティア事業に関する連携の覚書を結んだ日本体育大学。途上国におけるスポーツの普及・振興へのより一層の貢献と、学生の人材育成を目指している。2013年度からの3年間で、49人の卒業生がJICAボランティアとして世界に羽ばたいている他、ブラジル、カンボジア、ネパールなどの国には、延べ70人の学生が短期ボランティアとして派遣された。「大学が持つ体育の知見を求めている国はたくさんあります。世界で活躍できる人材を輩出することが、今の私の目標です」と黒木さん。可能性に満ちた学生たちの目は、広い世界へと向いている。

ワールドフェスタの参加者はおよそ300人。小学校4〜6年生を中心に、普段から公民館で開催されている体験教室に通う子どもたちだ。

「この子どもたちが成人する頃には、もっと国際交流が盛んになっているはず。広い視野を持って国際社会で活躍

## 多彩な世界の遊びを体験 ネットを通じた交流も

ワールドフェスタの開催がきっかけで、現在はワールドフェスタの企画プログラムだ。「作戦を立てて、仲間と助け合いながらゴールを目指す」という特徴が、公民館が目指す青少年育成という目的に合うだけでなく、チームの仲間と一緒に作戦を考えることの面白さや、協力することの大切さを感じられる点が、参加者の人気を集めているという。「クバーラを通して、友達と仲良くなったという感想も聞きます。また、クバーラのほかにも、体を動かすプログラムはどれも好評です」と宇野さんは話す。

イベントの名前が変わっても、クバーラはワールドフェスタの人気プログラムだ。「作戦を立てて、仲間と助け合いながらゴールを目指す」という特徴が、公民館が目指す青少年育成という目的に合うだけでなく、チームの仲間と一緒に作戦を考えることの面白さや、協力することの大切さを感じられる点が、参加者の人気を集めているという。「クバーラを通して、友達と仲良くなったという感想も聞きます。また、クバーラのほかにも、体を動かすプログラムはどれも好評です」と宇野さんは話す。



世界の国々の情報を学ぶこともできる

できる大人になってほしいと考えて、さまざまな企画を取り入れていきます」と宇野さんは話す。

14年からは、県内の大学に通う留学生を招いて、世界中のさまざまな遊びを体験するコーナーも開いている。昨年は、ベトナムのおはじきを使ったボードゲーム、オ・アン・クアン、やゴム飛び、タムのハンカチ落とし、モン・ソン・パー、や鬼ごっこ、オスのウサギとメスのウサギ、韓国のけんけん相撲、どりの戦いなどの体験イベントを開催した。日本の遊びと似ているものもあり、楽しかったという声が多く寄せられたという。

楽しさを前面に押し出したプログラムに加えて、ワールドフェスタでは世界をより深く知るプログラムも実施してい

る。昨年は、青年海外協力隊OBが任地での体験を語るコーナーや、インターネット経由の通話ソフトを利用した海外との対話などを取り入れた。

昨年参加した協力隊OBの任地は、ナミビア、タンザニア、エクアドル、トンガの4カ国。多くの参加者にとってはなじみのない国ばかりだ。それでも、実際に見聞してきた人が語る体験談に、子どもたちは熱心に聞き入った。「実際に外国に行った人の話は聞いていてドキドキする」「海外では食べ物がないと死んでしまう人がたくさんいることを知りました」など、強い印象を受けた参加者も多かった。「自分でできる国際活動をしていきたい」「もっと世界のことを知りたい」と、刺激を受けた人もいたようだ。

インターネットを使った対話では、ラオスやキルギスの子どもたちと回線をつないで対話し、現地のダンスも教えてもらった。インターネットの普及した現代だからこそ実現した交流だ。

ほかにも世界の食べ物に関する写真を展示するコーナーや、いろいろな国の民族衣装を試着して写真を撮るコーナーなど、世界の文化に触れ合う機会を多く作った。JICAの国際協力や青年海外協力隊についての紹介コーナーも設けている。今後は学校で英語の授業を手伝う外国語指導助手（ALT）の人たちとの交流など、より幅広い学びの場を目指していく。

次のワールドフェスタinひたは9月10日に開催予定だ。今年は何んな遊びが楽しめるだろうか。

世界各地の民族衣装を着て記念写真を撮るコーナーも人気だ



昨年はおよそ300人が参加したワールドフェスタ。今年もさまざまな企画が準備されている



チームで集まって戦略を相談



陣地をいくつかのゾーンに分け、仲間と共に得点を目指す。クバーラは戦略と協力が重要な遊びだ

## 世界とつながる 教室

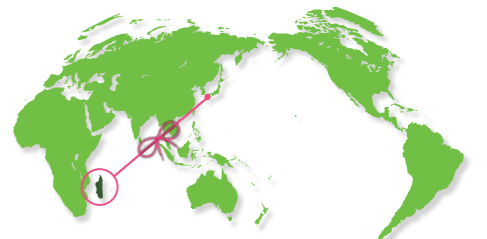
# 身体で感じる世界の遊び

子どもの頃、友達と一緒に校庭や公園で鬼ごっこを楽しんだ人は少なくないだろう。大分県日田市では、鬼ごっこによく似たマダガスカルの「クバーラ」など、遊びを通して世界を知るイベントを開催している。

仲間と一緒にゴールを目指すマダガスカル式鬼ごっこ

クバーラは攻撃側と守備側に分かれ、スタート地点から守備側チームの手をかくくぐって再び戻ってくることを目指す、チーム制鬼ごっこのようなゲームだ。アフリカ大陸南東の沖に浮かぶ島国マダガスカルに古くから伝わるこの遊びを、青年海外協力隊として現地に赴任した隊員が持ち帰り、九州海外協力協会から情報を発信している。特に道具などは必要なく、十分なスペースさえあれば、屋内でも屋外でも遊べるのが魅力だ。

「もともと、JICA九州の紹介で、公民館の職員研修の中でクバーラを体験したことがきっかけで、市内の各公民館にクバーラ体験が広まったんです。それならば、市内20の公民館を挙げて取り組む事業にできないかと考えて、2011年に国際理解教育と公民館の交流の機会と



connect with  
**Madagascar**  
マダガスカル

### スポーツを通して生活の質を高めたい



青年海外協力隊事務局  
海外業務第二課

小原 裕子  
O'HARA Yuko

大学卒業後、公立中学校教諭を経て青年海外協力隊に参加。帰国後、イギリスの大学院で開発学(教育)を学ぶ。帰国後、青年海外協力協会を経て、昨年9月より現職。

種目別のスポーツから衛生、環境問題、交通安全まで、実は思いのほか幅広い分野を網羅しているのが日本の保健体育という教科だ。体育やスポーツを通して、生活の質の向上を後押ししようと奮闘しているのが、小原裕子さんだ。

#### 保健体育は日本特有の教科 本質は「生きること」の学び

私は大学を出てから、中学校教諭として保健体育を教えていました。体を動かし、健康を維持することから、環境問題、交通安全など、生きることに関する知恵を総合的に学ぶ保健体育は日本にしかない科目です。教師として生徒たちに接する中で、「いろんなことを教えているけれど、自分で直接見聞きし、経験したものはどれくらいあるのだろう」と考えたことが、私が世界に目を向けるきっかけとなりました。

そこで青年海外協力隊に参加し、カリブ海の小さな島国セントビンセント及びグレナディーン諸島(以下、セントビンセント)に派遣されて、2カ所のセカンドリースクールで体育を教えました。

カリブ海諸国にはよくできた統一の学校カリキュラムがあるのですが、中身が現場まで浸透していないのが課題です。私が配属された学校の一つは教員も生徒も優秀だったので、カリキュラムの中身を具体的に教える教科手法のアドバイスが中心でした。一方、もう一つの学校は学校崩壊が起きているような状況。生徒・教員の双方に働き掛け、授業を成立させるところから始めなければなりませんでした。

そんなある日、生徒が先生に罰としてむちで打たれるのを目撃し、衝撃を受けまし

た。「生徒が自分に逆らった」と思い込んだ教師によって、生徒がむちで打たれる国があるという事実を悲しく感じるとともに、開発途上国と先進国、両方の現場を見た自分だからこそ、できることがあるのではと思うようになりました。

#### スポーツが与えてくれる価値 笑顔を目撃につなげる

東京オリンピックが決まったのは、一度日本に戻った後、イギリスの大学院で開発のための教育社会学を学んでいたときでした。オリンピックに向けて、安倍総理が公約として掲げた「スポーツ・フォー・トゥモロー」というプロジェクトが立ち上がり、帰国した私は、途上国で運動会を開くプロジェクトを担当することになりました。開催地はアフリカの馬拉ウイ。現地の学校で教える現役協力隊員と一緒に、体育が定着していない村の小学校で、なんとか運動会を実現することができました。

運動会をやってみて再確認したのは、スポーツは言語を超えたコミュニケーションだということ。子どもたちは英語が分からず、私は現地のチェワ語が分かりませんでした。すぐに覚えてくれました。また、現地の先生たちも、子どもへの思いはとても強く、授業の質を高めようとはがんばってくれました。こうした先生たちを後押しし、より良



馬拉ウイの運動会の練習。現地の学校の先生たちはもちろん、地元の人たちからも応援された

い教育に向けた支援をできるのが、この仕事の最大の魅力です。

現在、私は体育・スポーツに関するボランティア支援の取りまとめやボランティア派遣の手続き、関係機関との調整などを担当しています。スポーツだけでは衣食住を満たすことはできませんが、他の手段と組み合わせれば、人の生活の質が高まり、より良い人材が育ちます。2020年以降もスポーツを通じた協力の意義を深め、スポーツの価値を多くの人に知ってもらえるように、これからもがんばりたいと思います。



セントビンセントの教え子たちと。日本の中学～高校生の年齢に相当する子どもたちに体育を教えた

## 北岡理事長がアメリカを訪問 国際機関の要人と面談

01



国連総会のリュッケトフ議長と北岡理事長

JICAの北岡伸一理事長は、4月4日から9日にかけてアメリカを訪問し、国際機関の要人と面談を行いました。その中で、北岡理事長は、持続可能な開発目標（SDGs）の確実な実施に向けて、今年重要なイベントである世界人道サミットや、日本が議長国を務めるG7、初のアフリカ開催となる第6回アフリカ開発会議（TICAD VI）などの機会を活用して発信を強化し、国際社会での認識も高めていくべきとのメッセージを伝えました。

最初の訪問先のニューヨークでは、4人の要人と面会。国連人道問題調整事務所（OCHA）のステファン・オプライエン事務次長とは、世界人道サミットに関して、昨年の仙台防災会議を踏まえた災害の事前投資の重要性などについて議論。国連平和維持活動局（DPKO）のエルベ・ラドスミス長官とは、最近のPKO活動の状況と、南スーダンにおけるODAとPKOの連携について意見交換しました。

また、国連開発計画（UNDP）のテ



世界銀行のインドラワティ専務理事と北岡理事長

DGsの実践に向けて、世界人道サミットやTICAD VIでの一層の連携に対する期待が述べられました。国連総会のモーエンス・リュッケトフ議長とは、次期国連事務総長選や、安全保障理事会の改革と国連総会の役割などについて意見交換しました。

次に北岡理事長はワシントンを訪ね、米国防務省（US AID）のゲイル・スミス長官とは、3月に行われた日米開発対話などについて、世界銀行のスリ・ムリヤニ・インドラワティ専務理事とは、5月の開催に向け調整中のJICA-世界銀行ハイレベル対話などについて意見を交わしました。

さらに、ブルッキングス研究所で行われた「不安定な地域において、いかに開発を実現するか」と題した公開イベントにも出席し、基調講演を行うとともに、パネル討論に参加しました。

JICAは今後もさまざまな国際機関や二国間ドナー、シンクタンクと連携していくことにより、開発効果の発現に努め、国際社会の発展に貢献していく方針です。

## トーゴの新しい漁港の整備を支援

02



署名式に出席したコッシー・アシマイドウ経済・財政大臣付、開発計画担当大臣と飯村学コートジボワール事務局長

JICAは4月13日、トーゴ共和国政府との間で、「ロメ漁港整備計画」を対象として27億9400万円を限度とする無償資金協力の贈与契約を結びました。

トーゴは、天然の良港とされる首都ロメの港から北部のブルキナファソ国境までをつなぐトーゴ回廊を基軸とした国家開発を進めています。起点となるロメ港は、「港湾立国」政策に基づく商業港の拡張によって、漁港の面積が5年前に比べて3分の1程度に縮小。漁船の密集による安全上の問題が生じているほか、排水機能の不備など衛生環境の悪化も課題となっています。

そこで、この事業では近隣の国有地に漁港を移転し、新たに整備します。港内の混雑解消と安全確保、水産物の衛生状況を改善するとともに、漁港機能を回復させることで、関係者の就業機会の維持・継続を図ります。トーゴが「経済成長加速化と雇用促進のための戦略」で掲げる水産業の振興を促進し、持続的な経済成長の促進と貧困削減に寄与することが期待されています。

## 中東・北アフリカの民間企業の活動を支援

03



署名式後に握手を交わすIFCアセットマネジメント社のギャビン・ウィルソンCEOとJICAの神崎康史理事

JICAは4月14日、国際金融公社（IFC）の子会社であるIFCアセットマネジメント社が運営する、中東・北アフリカ地域の民間企業を投資対象とするプライベート・エクイティ・ファンドに対する出資契約を結びました。

ファンドへの出資を通じて、エジプトやヨルダンなどの中東・北アフリカ地域の開発途上国に展開する企業を支援することが目的で、2012年10月にJICA海外投融資業務が再開されて以降、同地域向けの事業は初めてとなります。IFCや他の金融機関も出資参画しており、JICAは最大3000万米ドルを出資する予定です。主な投資対象分野としては、金融、インフラ、製造などが想定されています。

中東・北アフリカ地域では、「アラブの春」として11年から本格化した民主化運動以降、若年層を中心とする高い失業率を背景に、不安定な経済社会状況が続いています。今回の事業を通じて、同地域向けの民間投資を促進し、雇用の創出や経済成長に寄与することを目指します。

一人当たり最多の  
爆撃を受けた国

ラオスは、ニューヨーク・タイムズ  
の「世界で一番行きたい国」調査  
(2008年)で、第1位に選ばれた国  
だそうです。訪問前はなぜだろうと思  
いましたが、滞在中、少しずつラオスの魅  
力に目覚めていきました。人々は温かく  
穏やかで、時はメコン川のように緩やか  
に流れ、料理はとてもおいしい。現地で  
は、「老後はラオスに住  
みたい」と口をそろえる  
JICA関係者に何人も  
出会いました。

そんな魅力的なラオス  
は、東南アジアの最貧国  
でもあります。ラオスの  
開発を阻んでいる深刻な  
問題、それは不発弾です。  
日本ではあまり知られて  
いませんが、ラオスはベ  
トナム戦争時代、一人当  
たりで換算すると、世界  
で最も多くの爆弾が落と  
されました。不発弾が  
残る土地は、農業をするにも、学校や病  
院を建設するにも、事前の調査や除去活  
動が必要で、開発を遅らせる原因になっ  
ています。

今回の視察では、不発弾による被害が  
深刻な地域の一つである南部のサラワン  
県を訪れ、被害者3人から話を聞きました  
。被害に遭った場所を尋ねると、女性  
2人から、「料理のために火を起こした  
ら、その熱で地中にあった不発弾が爆発



不発弾の処理の現場



特別レポート

高橋尚子さんが見たラオス  
—もう一つの戦争と障害者スポーツの芽

緩やかな時の中で、人々がつつましく心豊かな生活を送るラオス。  
しかし、その暮らしは不発弾の危険と隣り合わせでもある。  
今年2月に現地を訪れたJICAオフィシャルサポーターの高橋尚子さんが、  
その現状と障害者スポーツの実態を伝える。

ASEANパラゲームで銅メダル  
を獲得したボン選手に話を聞く  
高橋さん



したんです」と答えます。男性は、「農作  
業で杭を打っていたところ、運悪く不発  
弾に当たり、爆発して片足を失いました」  
と話してくれました。  
村の人々が危険と隣り合わせの生活を  
送っていることを知り、衝撃を受けまし  
た。農村部に住むラオスの人々にとって、  
戦争はまだ終わっていないのだと思いま  
す。不発弾のリスクを回避する方法を伝  
える教育や啓発活動の重要性を痛感しま  
した。

平和構築無償資金協力を通じて機材(灌  
木除去機)を供与するなど、不発弾処理  
に取り組むラオスの政府機関「UXO  
Laos」への協力を行っています。とは  
いえ、視察したサラワン県で処理が済ん  
でいるのは県全体の1%に過ぎず、他の  
地域も含め、今後も途方もない努力が必  
要です。継続的な協力が不可欠だと感じ  
ました。

ラオスの障害者とスポーツ  
生きがいを見つけ

不発弾によって障害を負った方を含

め、ラオスでは障害のある  
人が、人口の8%に相当す  
る約53万人いるといわれて  
います。そんなラオスで、  
障害者スポーツを長年にわ  
たって支援している日本の  
NPO法人「アジアの障害  
者活動を支援する会(ADD  
DP)」の活動も視察しま  
した。ADDPは、草の根  
技術協力事業を通じてJICA  
とも連携しています。

ADDPが支援した選手  
の中に、ラーさんがあります。  
現在20歳の彼女は、10歳の  
とき、友達とたき火をして  
いた際に不発弾が爆発し、  
破片が目刺さって全盲にな  
りました。学校にも行け  
ず、泣くばかりの日々を送  
っていたところ、ADDPの  
勧めで盲学校に入学。その  
後、運動神経の良さを生か



不発弾の被害者への聞き取り

して、障害者スポーツの「ゴールボール」  
の中心選手になり、昨年12月のASE  
ANパラゲームでは、銀メダルを獲得し  
ました。ゴールボールと出会ってから、  
性格も明るくなり、リーダーシップを発  
揮できるようになったそうです。  
視覚障害のある16歳のボンさんも、AD  
DPの支援を受けた一人。陸上選手の彼  
女は、昨年のASEANパラゲームで銅  
メダルを獲得しました。この快挙を支え  
たのが、ADDPから派遣され、陸上競  
技を指導している羽根裕之さんです。  
羽根さんは、もともと陸上選手でした。  
しかし、ある時、仕事先で事故に遭い、  
左手の自由を失います。「左手が不自  
由になり、最初はとても荒れて、喧嘩腰に  
なりがちだった時期もありました。でも、  
障害者陸上に出会ったおかげで、人生が  
一変しました。やりがいを見つけたん  
です」。そう語る羽根さんは、07年に台湾  
で開かれたIWAAS世界選手権で幅跳び  
の日本記録を更新。多くの仲間にも出会  
ったそうです。



ADDPの羽根さんと

オスの選手団の一員として、選手を連れ  
て行くのが今の夢です」と語ってくれま  
した。  
スポーツ選手の引退後のキャリアを取  
り巻く環境は厳しく、特に障害者にとっ  
ては難しい問題です。日本もこのよう  
な課題を抱える一方で、世界にはラオスの  
ように、障害者スポーツの底上げが求め  
られている国があります。羽根さんが  
ADDPを通じて、ラオスで生き生きと  
活躍している姿を見て、これこそ途上国  
での障害者スポーツ支援のロールモデル  
だと感じました。

日本は、2020年までに100を超  
す国々で、1000万以上の人々にスポ  
ーツの喜びを届けることを目指す「スポ  
ーツ・フォー・トゥモロー」という国際  
貢献プログラムを実施しています。この  
プログラムを旗印に、4年後の東京オリ  
ンピック・パラリンピックの開催に向け  
て、私たち日本人ができることはまだた  
くさんある——。そう感じたラオス訪問  
でした。

高橋尚子 たかはし・なおこ  
中学から陸上競技を始め、大学卒業後は実業団へ。1998年の名古屋国際女子マラソンで初優勝。2000年のシドニーオリンピックでは金メダルを獲得し、同年、国民  
栄誉賞受賞。現役引退後は、公益財団法人日本陸上競技連盟理事などを務める他、環境活動やスポーツキャスター、JICAオフィシャルサポーターなどでも活躍中。



### Q3. 外交ならではのスポーツ協力ってあるの？

A3.

2014年初頭からSFTが始まり、外務省は2015年度にスポーツ外交推進事業の予算が計上されました。これによって、多彩なスポーツ外交が可能になりました。

例えば、在パラグアイ日本国大使館では、貧困地域の子どもたちや青少年薬物依存者に対して、大使

館員が麻薬対策庁や現地のプロ選手らと協力してバレーボールのワークショップを継続的に開催しています。これは、目標に向けて努力する姿勢やスポーツマンシップの醸成による健全な青少年の育成を目指す活動として、高く評価されています。また、強化のための陸上選手の日本招へいや柔道普及に向けた低所得者層への柔道着貸与のほか、SFTをテーマにしたレセプションを開催し、青年海外協力隊のスポーツ隊員やパラグアイの国内競技団体、政府関係者、NGOなどを招いて将来の技術向上や普及・交流のための意見交換を行いました。

他にも、「日本文化週間」の中で、柔道や空手、合気道、弓道の合同武道デモンストレーションを開催するなど、多彩な切り口からスポーツ交流に取り組めるのは、大使館ならではの強みです。



## Message from Cambodia

### カンボジアのサッカー復興、日本人が支える

2015年11月17日、サッカーのカンボジア代表は、ワールドカップアジア2次予選で日本代表と対戦した。プノンベンスタジアムを埋めた約3万人の観衆が熱い声援を送る中、カンボジア代表は一回り体格の大きい日本代表選手たちを相手に、果敢に攻め、守った。試合は2-0で負けたが、誰もがカンボジア選手たちの成長を実感した。



2023年の東南アジア競技大会を目標に練習に励む若手選手たちと寺岐友輔さん(手前)

1972年にはアジアカップで4位になったカンボジアだが、長い内戦と混乱でスポーツは国内から姿を消した。国際試合への復帰は95年。その後のサッカー復興には、多くの日本人が関わっている。

日本サッカー協会1級審判インストラクターの唐木田徹さんは、2008年から、JICAのシニアボランティアとしてカンボジアサッカー連盟の審判ダイレクターを務めている。広くカンボジア国民に愛されているサッカーだが、審判はほとんど育成されていなかった。試合を振り返るための録画機器もなく、一方的に服従させるだけ。唐木田さんは、「審判は試合と選手を守るためにいる」と伝えることから始めた。「尊敬される審判になれ」。この教えが、カンボジアサッカーの礎となっている。

また、ベガルタ仙台のコーチ陣が、同国の15歳以下の選手を指導中だ。2013年から今年1月までは青年海外協力隊員として寺岐友輔さんが指導。今年2月からは井上和徳さんが、14年に設立されたカンボジアフットボールアカデミーのヘッドコーチ兼U16代表監督として日本サッカー協会から派遣され、23年にカンボジアが主催する東南アジア競技大会を目指す若手選手の育成にあたっている。

他にも、カンボジアサッカー連盟の技術委員長を務める小原一典さんや、プロリーグで活躍する15人の日本人選手もいる。

かつて戦禍に摘まれた大輪の花が再び咲く日は近い。

(在カンボジア日本国大使館)

### Q2. どんな活動が実現しているの？

A2.

スポーツを通じた協力には、大きく分けて、国際大会に出場するようなトップレベル選手の育成と、一般の人たちにスポーツのすばらしさを伝える草の根レベルの振興の二つの柱があります。

草の根活動では、子どもたちに運動することの面白さを知ってもらうためにアフリカで運動会を開催したり、貧困地域の人々に柔道やサッカーに必要な用具などを贈ったりするなど、多くの人々がスポーツを楽しめるような環境づくりを目指しています。

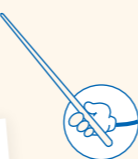
一方、トップレベル選手の育成では、選手やコーチ

を日本に招いて研修を受けてもらったり、日本から指導者を送り込んだりして、その国の競技レベルの底上げに貢献しています。

支援の対象には、もちろん障がい者スポーツも含まれます。昨年11月には、ベトナムから水泳とパワーリフティングの選手4人ずつと、それぞれのコーチを招きました。途上国では障がい者スポーツの環境は厳しく、日本で研修の機会を提供することには大きな意義があります。パラリンピックに向けたバリアフリー体制の構築など、日本側も学ぶことの多い招へいでした。

POINT

1. さまざまな団体が力を合わせてスポーツで国際貢献
2. トップレベル選手の育成と裾野を広げる草の根活動の二本立て
3. ワークショップから意見交換まで多彩な協力を推進



### Q1. Sport for Tomorrowってどんな取り組み？

A1.

2020年オリンピック・パラリンピックの招致の際に、安倍総理が「2020年までに100カ国以上、1,000万人以上を対象にスポーツを通じた国際貢献を行う」と約束したことが、SFTの出発点です。東京大会開催に向けてこの約束を実現するため、オリンピック・パラリンピック・ムーブメントを広めるために、日本発のさまざまな取り組みを展開しています。

活動団体で構成されるSFTコンソーシアムという官民の集合体には、2016年3月29日現在で180団体が参加しています。外務省やスポーツ庁などの

官公庁から、国際交流基金やJICAなどの独立行政法人、NPO、NGO、各種スポーツ団体、民間企業、大学、地方自治体など、参加団体の得意分野は多種多様。こうした官民協力は、スポーツ分野では画期的な体制です。

東京オリンピック・パラリンピックに向けた取り組みは、スポーツ交流や文化交流、自治体同士の連携、広報活動など、多種多様ですが、SFTはその中心となるものです。各団体が、自分たちの強みを生かして活動しています。

ベトナムからパラ水泳選手を招へいし、宮城県でトレーニングを実施

パラグアイで日本国大使館が主催しているバレーボールのワークショップ



# ココエリ

「ここが知りたい」。国際協力に関する政策を外務省の担当者が分かりやすく解説します！

テーマ

Sport for Tomorrow (SFT)

外務省 大臣官房人物交流室長

品田 光彦

SHINADA Teruhiko

SPORT FOR TOMORROW

1979年外務省入省。ニューヨーク国連日本政府代表部、在セルビア日本国大使館、外務省総合外交政策局、国際協力局勤務などを経て、2015年3月より現職。



# Brazil

【ブラジル】

写真・文＝永武ひかる(写真家)

もう一つのリオ  
〜ファヴェーラ断章



カーニバルの公式会場サンボードロモ。  
子どもカーニバルのパレードの合間、参  
加者たちが、楽しそうに駆け抜けた



c  
d



- c. マカッソスの坂道で、喜び勇んでサッカーの練習に向かう少年に行き交った
- d. サンタマルタでは、柔術のクラスで大勢の子どもたちが組み合せて歓声を上げていた
- e. 日差しが和らいだ夕方、サンタマルタの丘のグラウンドで若者たちがサッカーを楽しんでいた



e

て、赤いロープウェイが通っている。そのゴンドラに乗って空中から眺めると、家並の間にスペースが見えた。強い日差しの下、サッカーのグラウンドで若者たちがボールを蹴っている。暴力的な社会に生きる少年たちを描いた映画『シテイ・オブ・ゴッド』。設定は今から半世紀ほ

ど前だが、その舞台となったシタージ・ジ・デウスで子どもたちと話すとお気に入りのサッカーチームの話で盛り上がる。街の広場では、そろいの黄色いユニフォームを着た少年たちが手をつなぎ輪になっていた。「昔とはずいぶん変わったよ」。少年たちを率いるリーダーの男性は

感慨深げにそう言うと、皆を連れて、隣の芝のグラウンドで練習を始めた。UPPが最初に設置されたサンタマルタでは、丘の上のグラウンドにぎやかな声が響いている。迷路のような路地を下ると、柔術のクラスで子どもたちが組み合せて汗を流していた。



a

喜々として子どもたちが会場を走り抜ける。色鮮やかな仮装やユニフォーム姿が続いて、付き添いの大人たちも後を追う。パレードの合間のくだけたひとときに観客も拍手喝采、温かい熱気に沸いた。毎年、サンバチームが競い合うリオの公式カーニバルの子どもの部。会場のサンボドロモは、この夏開催されるオリンピックの舞台の一つだ。屋根のないスタジアムから見える山肌には、ブラジルでファヴェーラと呼ばれるスラムに小さな家々が

ひしめき合う。リオの都市に混在して際立つ景観だ。リオにあるスラムの数は数百ともいわれ、有名なサンバチームの本拠地の多くもこれらのスラム地域に根差している。スラム住民は、リオ全体の人口の4分の1を占めるほどだという。軍警察による治安維持部隊（UPP）が配置されているいくつかの地区を訪れた。レンガを積み重ねた簡素な家やトタン屋根がぎっしりと大地を埋め尽くす複合スラム地域、アレマン。なだらかな丘に沿っ



b

- a. 複合スラム地域アレマンとロープウェイ。駅の近くにUPPが常駐している
- b. カーニバルの会場サンボドロモは、今夏オリンピック競技場の一つ。世界的なブラジル人建築家オスカー・ニーマイヤーの設計で、向かい合う2つの観戦スタンドの間にパレード道が横に長く伸びる。その場外の丘には簡素な家々が並ぶ



- i. 家の壁がグラフィティで彩られたプラゼーレスの路地
- j. 写真ワークショップの一環として、自分たちが暮らす地区のグラフィティ・ストリートを写す子どもたち



永武 ひかる (ながたけひかる)

世界各地で撮影・取材を行い、ブラジルでの活動は20年を超える。2000年から世界の子どもたちが参加する非営利の写真プロジェクト「ワンダーアイズプロジェクト」を主宰。近著は、リオの小学生の暮らしに1年間寄り添った写真絵本「世界のともたち3 ブラジル」。

■「ワンダーリオ」写真展

写真家・永武ひかると、リオのスラムの子どもたちが写した写真約100点を通して、リオの魅力や素顔に迫る。  
 会場：海外移住と文化の交流センター（神戸市）  
 会期：7月28日（木）～8月31日（水）  
 URL：www.wondereyes.org



g

コパカバーナ海岸に近いタバジャラス。坂を上ると家の壁に彫られた大きな肖像画が目飛び込んできた。温かみのある深いまなざし。「亡くなったおじいさんをしのんで、お母さんがアーティストに頼んだの」と、その家の少女が教えてくれた。

丘の斜面に伸びるプラゼーレスでは、路地の一角に入った途端、アートの世界に引き込まれた。赤や黄、水色にピンク、鳥や花、キャラクターなどが、流れる線や模様で彩られ、心にリズムを湧き起こす。アーティストが家の壁に描いたグラフィティのオンパレードだ。

「こんなアートプロジェクトが実現するとは思ってもみなかった。気分が明るくなる」と、住民は話した。ファヴェーラに暮らす人々は、それぞれに事情は千差万別で、格差社会や治安などの問題も多い。けれども、日々の営みの中で文化が生まれいく、そのエネルギーがあった。



f



h

- f. タバジャラスの家の壁に彫られた亡き家族の肖像。まなざしが語りかけるかのようだ
- g. モーホ・アズウの自治会に貼られた昔の写真と、添えられた言葉。「私たちの地区の苦難の歴史を知ってる？今の暮らしは楽園」
- h. サンタマルタの銃弾の跡が残る壁。明るい街並みが描かれ、その上にUPPが常駐する

## 南部のお茶の楽しみ方といえば

### シマロン



さまざまな色や柄のクエアが、お茶の時間を楽しく演出してくれる（提供：日本マテ茶協会）

南米の亜熱帯地域は、マテ茶の原産地だ。日本でも最近、見掛けるようになったマテ茶だが、ブラジル南部では、“シマロン”という飲み方で楽しまれている。

お湯を注ぐ器は「クエア」と呼ばれ、そこに「ボンバ」と呼ばれるストローを挿して飲むのがブラジル流だ。

家でのくつろぎの時間や仕事の最中、また、親しい仲間が集まった際には、何度もお湯をつぎ足して回し飲みをするなど、ブラジル南部の暮らしにシマロンは欠かせない。

歴史を紐解けば、ブラジル発見当時、南米大陸南部の先住民の間では、地位の高い人々だけがマテ茶を飲むことを許されていたという。

昔は、クエアにはヒョウタンなどが使われていたが、現在では瀬戸物やガラス製の器も多くなった。ボンバも、竹などの筒状の木材から、金属製の物が普及している。

ブラジルでは、毎年5月にフェナシン（FENACHIM）と呼ばれるシマロンのイベントが開催されている。昨年も、参加者12万人を超える大盛況となった。

ブラジルを訪れたら、ぜひシマロンでくつろぎのひとつを過ごしてみたいだろうか。

取材協力：NPO法人ABT豊橋ブラジル協会

## 地球ギャラリー

# ブラジルの文化を知ろう！

## ブラジル料理といえば

### シュハスコ

ブラジルでは、週末の家族の団らんとパーティーなど、大勢で食卓を囲むとき、必ず「シュハスコ」が登場する。シュハスコは、牛や豚、鳥のさまざまな部位の肉を鉄串に刺し、シュハスケイラと呼ばれる専門のグリルで焼くブラジリアンBBQだ。お店では、肉を焼く人はシュハスケイロ、客席でシュハスコを切り分ける人はパサドルと呼ばれる。

東京の秩父宮ラグビー場近くにあるブラジル料理店「イグアス」でチーフシ

ュハスケイロを務めるアゼヴェド・エルトンさんは、「ブラジルでは、各家庭にシュハスケイラがあります。マンションにも、ベランダに小型のものを置いています」と語る。肉に付けるソースの味も、それぞれ家庭の味があるようだ。イグアスでは、酸味のきいたピネガーソースを提供している。

ラグビー観戦後は、仲間と共にシュハスコでさらに盛り上がりはどうか。



### 【RECIPE】

#### ●材料(10人前)

牛または豚、鶏の赤身肉400～500g / 岩塩適量

#### ソース:

ピネガー・玉ねぎ・トマト・ピーマン各適量

- 1 肉の表面の水分をよく拭き取り、全体に岩塩を振りかける。
- 2 鉄串を刺し、シュハスケイラの中(もしくはバーベキューコンロの上)でゆっくり回しながら表面に焦げ目がつくまで炭火で焼く。焼き加減は、ミディアムレア。
- 3 焼けた部分からナイフで削ぎ取って食べる。赤身部分が多くなったら、塩を振ってまた表面を焼く。
- 4 大きさが最初の3分の1程度になったら、串から外し切り分けて食べる。

#### ソースの作り方:

玉ねぎ、トマト、ピーマンをみじん切りにし、ピネガーを加える。

### 【SHOP INFORMATION】

#### ブラジル料理 レストランテ・グリル・ イグアス

〒107-0061

東京都港区北青山2-7-25

神宮外苑ビル2F

電話番号:03-5414-1010

営業時間:月～土曜日:[ランチ]11時半～14時(ラストオーダー)

[ディナー]18時～21時半(ラストオーダー)

[バータイム]21時～夜中

日曜日:[ディナー]16時～21時(ラストオーダー)



# イチオシ!

## M OVIE

### 『ホース・マネー』

『ヴェンダの部屋』『コロッサル・ユース』などで、リスボンのスラム街を描いてきたポルトガルの巨匠ペドロ・コスタ監督が、再び同地区を舞台とする傑作を生み出した。数十年前にアフリカからポルトガルにやってきた主人公は、首都リスボンのスラム街に暮らし、日銭を稼ぐためにレンガ工場などで働いてきた。年老いて、今、人生を終えようとしている彼は、かつて故郷で飼っていた1頭の馬のことを思い出す――。山形国際ドキュメンタリー映画祭2015でインターナショナル・コンペティション部門大賞を受賞したこの作品は、ポルトガルのカーネーション革命やアフリカ諸国の独立などの近代史を背景に、ポルトガルに暮らすアフリカ移民の苦難の歴史と記憶を描き出している。



2014年／ポルトガル／1時間44分

監督：ペドロ・コスタ

出演：ヴェントウーラ、ヴィタリナ・ヴァレラ、ティト・フルタド、アントニオ・サントス

公開：6月18日(土)よりユーロスペース(渋谷区)他 全国順次公開

URL：www.cinematrix.jp/HorseMoney/

配給：シネマトリックス

## E VENT

### 『日本・ブータン外交関係樹立30周年記念事業 「ブータン～しあわせに生きるためのヒント～」』

日本とブータンの外交関係樹立30周年となる今年。その記念事業として開催される本展覧会では、「ブータン王国国立博物館」「ブータン王立織物博物館」「ブータン王立テキスタイルアカデミー」の全面協力の下、各施設が所蔵する貴重な文化資料を日本で初めて公開する。今年2月に王子が誕生したばかりのブータン王室からは、現国王・王妃の衣装などが特別に出展される。この展覧会は、「ブータンの生活様式」「ブータン仏教と信仰」「愛されるブータン王室」の3章構成だ。約140点の展示品を通して、「しあわせの国ブータン」の暮らしに根付く伝統文化を見つめ、その教えに触れてみてはいかがだろうか。



会期：5月21日(土)～7月18日(月・祝) 10:00～17:00

※最終入場は閉館30分前まで(会期中無休)

会場：上野の森美術館(東京都台東区)

問：サンライズプロモーション東京(全日10:00～18:00)

TEL：0570-00-3337

## B OOK

### 『「世界遺産」謎解きガイド』

歴史ロマンを10倍楽しむ「読み筋」とは!

1972年に始まり、今では登録数が1,000件を超えた世界遺産。人気の観光スポットとして人々を魅了しているが、ただ景観を楽しんで帰るだけではもったいない。「マチュ・ピチュ」「ナスカの地上絵」「ストーンヘンジ」のように、多くの世界遺産には、歴史の間に埋もれ、解明されていない謎が残されている。本書では、そんな世界遺産の未解決ミステリーをカラー写真満載で多数ご紹介。ページを開き、歴史のロマンに触れてみてはいかがだろうか。



この本を  
1人の方に  
プレゼント  
詳細は  
38ページへ

日本博学倶楽部 著  
PHP研究所  
734円(税込)

## B OOK

### 『ヒマラヤに捧ぐ』

アルピニスト野口健さんの写真集第二弾となる本書。野口さんは昨年4月25日、ヒマラヤの標高4,500メートル地点でネパール大震災を経験。山を下って到着した村は壊滅的な被害を受けていた。本書には、復興活動に奔走した野口さんが目にした被災地の様子のほか、「生きること」を感じさせてくれるヒマラヤの大自然やネパールの人々の暮らしを写した作品が収められている。ヒマラヤに恩返しをしたい――。これまで50回以上ヒマラヤに通い続けている野口さんの思いが込められた1冊だ。



この本を  
1人の方に  
プレゼント  
詳細は  
38ページへ

野口健 著  
集英社インターナショナル  
2,700円(税込)

読者の声

「3月号特集「鉄道」を読んで」

■日本の経済成長戦略の一つ、インフラ輸出の一端がよく分かって良かったです。中古車両の方が開発途上国には合っているというのは面白いですね。何でも最先端が良いというわけではないということがよく分かりました。その国の発展段階に合った支援が良いということですね。  
(群馬県/60代/男性)

■私は鉄道が大好きなので、この特集を見てとても興奮しました。先日も、廃止になってしまった寝台特急「カシオペア」を見に上野まで行きました。日本で役目を果たした列車たちが世界に羽ばたき、さまざまな人々の生活を支える。とても胸が熱くなる記事でした。  
(東京都/20代/女性)

「4月号特集「地域の宝」を読んで」

■改めて日本各地の優れた技術や産物などを知りました。それが開発途上国で利用され、役立っているのは素晴らしいことです。日本が世界の国々と共存共栄を進める上で、技術輸出は重要です。特に、日本の優れた環境技術は海外でも役立つはずだと思います。  
(神奈川県/80代/男性)

■「有田みかん」の産地は私の生まれた町であり、育った場所でもあります。このように特集として取り上げられるのは、私たちの町の誇りです。地域活性化のためには、住民一人一人が、どうすればこの町の良さや明るさなどを伝えられるのかを意識して、行動しなければいけないと改めて認識しました。  
(和歌山県/20代/男性)

本誌へのご意見・ご感想や  
JICAへのご質問を  
お寄せください。



添付のアンケートはがき、Eメール、FAXから、本誌に対するご意見やご感想、またJICAへのご質問を、氏名・住所・電話番号・職業・年齢・性別・ご希望のプレゼントを明記の上、お送りください。ご記入いただいた個人情報統計処理およびプレゼント発送以外の目的で使用いたしません。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。

◎応募締切：2016年7月15日

Eメール: jica@idj.co.jp  
FAX: 03-3221-5584 (『mundi』編集部宛)

- ① モンゴルのツァツアルガン製品
- ② 書籍『「世界遺産」謎解きガイド  
歴史ロマンを10倍楽しむ「読み筋」とは』(p37参照)
- ③ 書籍『ヒマラヤに捧ぐ』(p37参照)



①



②



③

本誌をご希望の場合は  
下記方法で  
お申し込みください。

申込方法

本誌をご希望の方には、送料をご負担いただく形で送付いたします。巻末の払込取扱票に、氏名・住所・電話番号・ご希望の送付期間・送付開始月を明記の上、指定の金額を郵便局でお支払いください。入金確認後、発送を手配いたします(入金から1週間程度かかることもありますのでご了承ください)。複数冊、またはバックナンバーをご希望の方は送料が異なりますので、下記までお問い合わせください。

申込先 (株)国際開発ジャーナル社 総務部(発送代行)  
住所 〒102-0083 東京都千代田区麹町3-2-4 麹町HFビル9F  
TEL 03-3221-5583  
FAX 03-3221-5584  
Eメール order@idj.co.jp



次号予告 (2016年7月1日発行予定)

アフリカ

投資や貿易、資源開発など、日本にとっても存在感が高まっているアフリカ。第6回アフリカ開発会議(TICAD VI)が8月に開催されるのに先立ち、成長著しいアフリカの“光”の部分と、その一方で感染症など依然問題を抱える“影”に迫ります。



JUNE 2016 No.33  
編集・発行/独立行政法人 国際協力機構 Japan International Cooperation Agency: JICA

〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25 二番町センタービル  
TEL: 03-5226-9781 FAX: 03-5226-6396 URL: http://www.jica.go.jp/  
バックナンバーはJICAホームページ(http://www.jica.go.jp/publication/mundi)でご覧いただけます。  
本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。



©Yuki Asada

## 黄色い金、祖国の目覚め

モンゴルは草原の国。冬は極寒、夏は酷暑の乾燥した高原地帯に、ただ草ばかりが風にそよぐ。そんな厳しい環境の中、地元の人々が薬効あらかたな「黄色い金」として愛用してきたのがツァツアルガンだ。英語ではシーバックソーン、あるいはシーベリーとも呼ばれる。グミの親戚で、ビタミン、ミネラルのほか、自然界でも珍しいオメガ7脂肪酸をはじめとした豊富な抗酸化物質を含む黄色い実をつける。

「モンゴルでは、風邪を引いたときにツァツアルガンのジュースを飲みます」と話してくれたのは、この果実を生かした化粧品・健康食品の企業を立ち上げたボロルトゥヤ・ドルジスレンさんだ。「私も小さい頃から、ツァツアルガンを飲んで育ちました。アメリカの大学を卒業して化粧品会社に勤

めていたのですが、ツァツアルガンの農場を営む父に、モンゴルに戻って国のための事業をしてみないかと言われて、起業を決意したのです」。3年前にシーベリーファームプロダクツ社を立ち上げたドルジスレンさんは、ツァツアルガンを材料に、モンゴルならではの化粧品開発を始めた。

自然環境の厳しいモンゴルでは、酪農以外の農業は発展途上だ。野菜・果物はもちろん、医薬品や健康食品も多くを輸入している。ドルジスレンさんは、モンゴルの人たちに国産の化粧品・健康食品を提供するとともに、鉱物資源に依存しがちな経済の新たな柱として、モンゴルならではの農業育成を目指している。「モンゴル発、健康のワンストップショップへ」。黄色い金が、モンゴル農業の未来を拓く。



首都ウランバートルの旗艦店では、化粧品からヘアケア、健康食品、ジュースに至るまで、幅広い商品を販売するほか、エステサロンも運営している

- ★モンゴルのツァツアルガン・カプセルとエキスを2人にプレゼント! →詳細は38ページへ
- ★シーベリーファームプロダクツ社の商品は現在、同社ホームページからオーダーできます。まもなく日本での販売も開始される予定です。  
<http://www.seaberryfarmproducts.com/>







私の  
**なんとか  
しなきゃ!**

Vol. 68

## PROFILE

1967年佐賀県出身。小学1年生から柔道を始め、中学1年生のときに東京の「講道学舎」に入門。日本体育大学進学後は“平成の三四郎”の異名を取り、世界選手権2階級制覇をはじめ、オリンピックに3度出場。92年のバルセロナ五輪では、71kg級で金メダルを獲得した。2000年の現役引退後は、全日本女子柔道コーチを務める傍ら、町道場「古賀塾」を開き、次世代の子どもの育成を図っている。

現役引退後、私は神奈川県内に町道場「古賀塾」を開き、下は幼稚園から上は60歳近くまで、幅広い年齢層の方々に柔道を教えています。幼いころの私は、ぜんそく持ちで体が弱く、人前で何かをすることが苦手な性格でした。それが、柔道に出会ったことで少しずつ変わることができました。努力の大切さや、何度も立ち上がっていく強さ、いかなる場面でも自分を支えてくれる仲間が存在。柔道から学んだ数多くのことを、柔道を知らない人たちにも伝えたい——。そんな思いから、誰でも気軽に足を運べる町道場を始めたのです。

昨年、ブータンで柔道を指導している青年海外協力隊員から、前触れもなく一通のメールが届きました。その方は、現地の子どもたちが本場の稽古を体験するための日本遠征プロジェクトを企画しており、その応援メッセージをお願いされたのです。もちろん引き受けようと思い返事をしましたが、よくよく話を聞くと、ブータンでは柔道が始まってからまだわずか5年。国内唯一の道

場には畳が無く、マットを敷いて練習しているとのことでした。不意に“自分も何かやりたい”という思いが込み上げ、知り合いの畳店や会社にも声を掛けて、現地に約100枚の畳を贈ることにしました。

誰かの夢を共に実現させたときの喜びは、自分自身の夢がなくなったときとは違う喜びがある。これは、私が指導者になって感じるようになったことです。子どもたちが真新しい畳の上で練習する姿を想像してワクワクしながら、ブータンの柔道の発展を支えることが、いつしか私の夢になっていました。

その後、無事に畳が届いたという連絡を受け、今年2月には実際にブータンの道場を訪れました。子どもたちは最初、緊張のあまり直立不動で顔をこわばらせていましたが、柔道を教えるうちに次第に笑顔に変わりました。その1カ月後、今度は日本の塾生たちともつながりを持ってもらいたいと思い、彼らを古賀塾に呼んで一緒に稽古を行いました。ブータンには畳を掃除する雑巾が

## 誰かの笑顔を演出したい

柔道家 **古賀稔彦**  
KOGA Toshihiko



古賀稔彦と  
ともに作る  
柔道畳「三四郎」  
前田豊製作所

 OG Wellness

無いと聞いていたので、最後に、塾生一人一人の名前を書いた雑巾を手渡しました。数日だけの交流でしたが、私にとって彼らは全員大切な教え子です。今後どのように成長していくのかを楽しみに、またブータンの道場を訪ねたいと思っています。

「精力善用」「自他共栄」。人のため、社会のために役立つことをしなさいという、柔道の精神を表した言葉です。世界各地で活動する青年海外協力隊の方々と同じように、私はこの柔道精神を広く伝えていく使命と責任を感じています。臆病だった自分自身を変えてくれた柔道。今度は私が、柔道を通じて多くの人たちの笑顔を演出していきたいと思っています。

「なんとかしなきゃ! プロジェクト」は、開発途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクトです。ウェブサイトやFacebookの専用ページを通じて、さまざまな国際協力の情報を発信していきます。

「なんとかしなきゃ」で  検索